

日本中世都市の空間とその研究視角

山村 亜希

I 問題の所在

日本中世都市研究には、戦前以来の長い歴史がある。仁木宏^①は、その潮流を三段階に分けて、以下のように明快に整理した。一九六〇年代は、京都・堺・博多などの中世後期の大都市を主たる分析対象とした自由都市論が研究の主流であったが、一九七〇年代になると、網野善彦による都市論が登場し、中世都市遺跡の発掘調査の増加もあいまって、各地で膨大な数の「都市的な場」が見出された。そして、一九八〇年代後期以降、考古学と建築史学、文献史学を中心とした学際研究が盛んに行われ、空間そのものから都市社会の性格や変容を論じる研究が主流となった。

仁木が指摘したように、一九八〇年代以降の中世都市研究においては、空間の復原と解釈を議論の中心に据えた学際研究が盛んに行われた点に特徴がある。この学際研究では、それぞれの専門分野が得意とする資料批判と解釈の方法を用いて、都市空間の形態・機能の復原と理論化を行い、その成果を持ち寄るというスタイルの共同研究が盛んに行われてきた。このとき、議論の中心となったのは、都市の空間構造の解明とその歴史的位置の説明であった。現在の中世都市研究においても、空間構造を議論の中軸とする研究状況は続いているが、一方で、これまでの共同研究スタイルを発展的に乗り越えるべく、それぞれの分野における資料批判と資料解釈の方法の再検討に注目が集まっている。このような研究の先鋒に

立つ前川要は、個人が複数の学問分野の資料を総合的に解釈して、空間形態・機能の復原や説明を行い、その成果を多角的に検証するシステムを備えた「学融合」研究の確立を強く主張している。^②筆者の専攻する歴史地理学においても、空間復原の資料としての地籍図の有効性の再検討が、藤田裕嗣によって積極的に進められつつある。^③

このように、学際研究の進展とともに、学問分野ごとに異なる資料批判とその解釈の方法の見直し、研究者の大きな関心と呼んでいる一方で、これまでも、そして現在においても、研究対象である空間構造をどのようなものとしてとらえてきたのかという、空間分析の前提に関わる視角を回顧した研究は、意外なことに、管見の限りほとんど見あたらない。学問分野や研究段階・時期、研究者によって、同じ空間という用語を使用しながらも、研究視角が異なっているがために、空間概念の意味に相違が生じていた可能性は、ほとんど想定されてこなかったと言わざるをえない。しかし、既に約四半世紀に及ぶ学際研究の間に、空間構造への研究視角や空間概念の意味が、首尾一貫していたとはいえないだろう。かつて筆者は、網野善彦の都市論における空間と考古学・建築史学を中心とする研究における空間とは、その意味するところが異なっており、それが仁木宏の懸念する現在の学際研究の停滞を引き起こす一因となっていると指摘したが、^④中世都市研究史を詳細に検討すれば、このような空間概念の相違は、他の局面でも見出すことができると思われる。もちろん、空間を軸とする都市論を発展的に継承するためには、個別の都市空間の復原に立ち戻って、資料批判と解釈の厳密化を図ることが重要であることは言うまでもない。しかし、これまでの研究における空間概念と空間構造への研究視角を回顧し、そこから今後の研究を展望することも、それと並んで必要な課題なのではないだろうか。

そこで本稿は、これまでの日本中世都市研究における空間構造への研究視角とその成果として提示された空間概念を整理し、今後の研究に有効な視角や方法を展望することを目的とする。中世都市研究については、すでに多くの研究者によって、研究史整理と今後の研究の展望がなされており、近年では、先述の仁木宏の他、伊藤毅^⑤、藤田裕嗣^⑥の論考がある。伊藤は、建築史学における中世・近世の都市史研究の動向を概観し、藤田は伊藤の扱った一九八〇年代後半以降の論考を、

地域別、都市類型別に分けて詳細に検討している。本稿もこれらの論考と同じ中世都市研究を対象としているため、その成果に負うところも大きい。しかし本稿は、これまでの展望研究とは、空間構造への研究視角や空間概念に注目するという点で大きく異なっている。

第二章では、従来の中世都市研究のうち、空間構造を論じる研究を五段階に分類し、それぞれの研究段階における問題設定とその問題を解決するために採られた空間分析の視角や方法を見出す。そして、その結果として復原された空間構造の構成要素、スケール、抽象度を検討し、各段階における空間概念を明確にする。この検討から従来の研究における問題点を考察する。第三章では、この問題点を克服するために有効な研究視角・方法を検討し、それを具体的に戦国期・織豊期城下町研究に適用することによって、どのような成果を提示することができのを見通すことにしたい。

ここで、本稿の検討範囲に関連して、二点を先に断わっておきたい。第一に、本稿は空間への研究視角を軸に研究史を振り返るため、歴史地理学的方法を用いた研究を主として取り上げることになるものの、空間のみを取りあげ、社会構造論を無視した研究史整理を行う訳ではない。中世都市研究における空間概念は、その研究の問題設定に大きく左右されることが予想される。そして、どういった社会構造論を研究の背景としているかによって、当然のことながら問題設定も異なる。そのため、空間概念を分析することは、自ずとその研究の動機となった社会構造論をも視野に入れることとなる。とはいえ、社会構造論が本稿の主題ではないので、社会構造論に深く立ち入ることはしない。第二に、本稿は、従来の空間構造への研究視角の交通整理を目的としている理論的な性格の強い論文である。そのため、これまでの研究で明らかとなった中世都市空間の具体像については、文脈に応じて触れるものの、その詳細な紹介は省略し、個別の事例研究も網羅的には採録しない。以上の二点によって、中世都市の空間構造論の具体的成果を論じる展望論文とは、異なる叙述スタイルをとることを、お許し願いたい。

① 仁木宏『空間・公・共同体』青木書店、一九九七。

② 前川要編『中世総合資料学の提唱』新人物往来社、二〇〇三。同編

『中世総合資料学の可能性』新人物往來社、二〇〇四。

③ 藤田裕嗣「市庭と都市のあいだ——地理学からの研究視角——」

〔中世都市研究会編『都市空間』新人物往來社、一九九四〕。同「日本中世における市庭と広場」国立歴史民俗博物館研究報告六七、一九九六。同「考古学との接点としての地割——前川要報告によせて——」歴史地理学四一一、一九九九。同「中世の交通路と市場」〔有田正一郎・遠藤匡俊・小野寺淳・古田悦造・溝口常俊・吉田敏弘

編『歴史地理調査ハンドブック』古今書院、二〇〇一〕。

④ 前掲注①。

⑤ 山村亜希「中世都市の空間構造と空間認識」〔仁木宏編『都市——前近代都市論の射程——』青木書店、二〇〇二〕。

⑥ 伊藤毅「日本都市史」建築史学六、一九八六。

⑦ 藤田裕嗣「日本中世都市史」建築史学三七、二〇〇一。

Ⅱ 中世都市研究における空間

(1) 封建都市論と戦国城下町

日本中世都市の空間を研究の主題として取りあげ、体系的に論じた研究は、文献史学の原田伴彦を嚆矢とする。戦前に原田は、一次史料から網羅的に日本全国の中世都市を抽出し、門前町、港町、宿場町、城下町、市場町に分類した^①。そして戦後の『日本封建都市研究』^②や『日本封建制下の都市と社会』^③においては、そのタイトルに如実に表れているように、中世都市を封建都市発達史の一段階に位置づける視点を強化させた。豊田武も、原田と同じ視点から、中世都市を封建都市への過渡期とみなした^④。中世都市を封建都市論の中に位置づける小野や豊田の研究視角は、五〇年代以降にも踏襲されたが、この段階では、地方の個別の戦国城下町を対象とした事例研究が進展した点に特徴がある^⑤。その後、室町期の守護所・守護城下町といった戦国城下町以外の城下町を積極的に見出す松山宏や今谷明の研究もみられた。その一方で、自由都市論^⑥も盛んであったことも記しておかねばならない。とはいえ、京都・堺・博多といった中世後期の大都市を主たる対象としていた自由都市論は、全体として空間形態への関心は薄かった。一九七〇年代以前の中世都市研究を、空間分析を含む研究に限定すれば、その主たる問題関心は、封建都市の形成過程の中に、中世都市空間、とりわけ戦国城下町をどの

ように位置づけることができるのかという点にあったと言えるだろう。

それでは、この段階で復原された空間とは、いかなるものであったのだろうか。原田伴彦は、諏訪門前などにおいて、町・市場・集落の位置比定を地図上で行っており、先駆的な復原研究として注目される。^⑨しかし数少ない一次史料のみを用いているがゆえに、復原は集落の位置を点として示すスケールにとどまり、街路や地割形態を問題とする大縮尺での空間復原には至らなかった。原田以降の戦国城下町を対象とする論考においては、復原を地図化することも稀となり、城・館、家臣屋敷、町・市の位置をモノグラフ的に文章で記述するスタイルが一般的であった。復原を地図化する場合でも、都市空間全体における構成要素の相対的位置を模式図として示すに留まった。

この段階での空間復原が地点表示レベルに留まったのは、中世都市を封建都市の発達段階に位置づける指標として、以下の二点を指定していたためであると思われる。第一に、都市空間全体における諸施設の密集度であり、第二に、城館、家臣屋敷、町屋の相対的位置関係である。例えば原田は、復原を通じて、町・市・集落分布の密集度を判定し、中世都市の形態には、「複式都市聚団」と「単式都市聚団」があることを指摘した。^⑩「複式都市聚団」とは、数個の集落が広範囲に分散し、囲郭を持たない自然発生的都市形態であるのに対し、「単式都市聚団」とは集落が一体のものとして囲郭内に集中する計画都市形態であるとする。そして、中世都市の大部分は前者の形態をとると論じた。このように原田は、農村から都市が分離する過程を判定する基準として、都市内における集落分布の密集度を使用している。また、戦国城下町研究においては、封建領主と民衆との二項対立的な関係を論証するために、前者を示す城館・家臣屋敷と後者を示す町場とが、近接しているのか、それとも分離しているのか、混在しているのかが大きな問題とされた。都市空間全体の中で、城館、家臣屋敷、町場の三要素の相対的位置関係さえ復原することができれば、封建都市としての成熟度を判定することが可能であったと言える。

一方、歴史地理学においては、伝統的に、過去の空間における地理的事象の形態復原が研究の目的とされ、一九六〇年

代以降には、藤岡謙二郎によって、複数の時期における景観を復元し、それらの変化を時系列に叙述する景観変遷史^⑫が提唱された結果、道路・諸施設・集落といった空間構成要素の形態を面的に復元する景観論と呼ばれる空間分析の視角が一般的となっていた。景観論の延長上には、都市内部の諸要素の結合関係のモデル化や、さらに広域の都市群ネットワークにおける都市相互の機能を論じる地域構造論があった。このような状況を考えると、歴史地理学が中世都市研究における地点表示レベルの空間復元に満足せず、そこに景観論の視点と方法を導入して地域構造論を展開するようになるのは、いわば当然の流れであった。

歴史地理学において、中世都市を対象として、景観論・地域構造論の視点から復元に本格的に取り組んだ研究としては、『長宗我部地検帳』を用いて、土佐の戦国城下町における武家屋敷・市屋敷の配置を復元した松本豊寿が挙げられる^⑬。松本は、戦国城下町においては、中世豪族屋敷を祖形とする給人居住部分域と中世市場集落を祖形とする市町地域という二つの異なる起源をもつ地域が、強権的に結合されたものの、一般的に接合はルーズで、一体化していなかったとする。また、都市的發展をみせる城下市町に比べて、給人居住域は未だ家臣の城下集住が徹底されず、屋敷の散在する農村的景観であったとする。松本は戦国城下町を、「郷村的城下町」と「半都市的城下町」の段階に分け、市町の商工業者が領主権力に直接掌握されるようになると、前者から後者へ変化するとした。このような松本の議論の基盤となった景観復元とは、屋敷の配列を模式図的に提示するものであり、屋敷地の形態や他の諸施設との位置関係を、現実の地図上で示す試みはなされなかった。一方、松本とほぼ同時期から戦国城下町の地域構造論に取り組んできた小林健太郎は、松本の復元を十分なものとし、土佐の城下市町を対象として景観復元を再検討した^⑭。その方法は、地検帳の屋敷配列と面積を地籍図や地形図と対照させ、集落形態を地割レベルから復元するという現実の空間形態に即した具体的で大縮尺のスケールのものであった。小林は、このようにして復元した城下市町の集落形態を類型化し、長宗我部氏の権力の増大に伴って、領国内における城下市町の経済機能も高まり、面的なひろがりをもせる市街へと発展したことを指摘した。

松本、小林の研究は、いずれも封建都市論を前提とし、封建都市の成立過程に戦国城下町を位置づけるという課題を文献史学と共有していた。文献史学は、この課題に応えるために、城館・家臣屋敷・町場の三要素の位置比定という方法を用いたが、松本と小林は、当時歴史地理学で盛んであった景観論と地域構造論を応用することで、これらの三要素の空間的結合関係をより詳細に、かつ実証的に示した。しかしその反面、問題設定の分野を超えた共有は、都市空間の変容過程と都市内部の地域構造の解明という歴史地理学固有の目的を掲げた松本と小林の研究を、封建都市論という枠組内に限定する結果を招いた。この段階では、空間そのものから、独自の都市像ないし都市理解を演繹的に提示する段階には到達していなかったと言える。

以上をまとめておこう。一九七〇年代以前の文献史学における研究は、封建都市論を共通の背景とし、各都市の戦国城下町から近世城下町への発達度を判定するために、城館、武家屋敷、町場という三つのパーツの密集度と相対的位置の提示が空間に求められた。そのため空間の分析方法は、上記の三要素を示す地点表示レベルにとどまり、地図化も小縮尺のスケールでなされることが多かった。一方、歴史地理学では、同時期の景観論と地域構造論の動向を受けて、より大縮尺の都市内部空間スケールで、城下町構成要素の形態を地図化する研究がなされた。とはいえ、歴史地理学の研究も、封建都市論の枠内での空間解釈に留まり、空間は三要素の相対的位置関係という模式図的な説明によって総括された。

（２） 網野善彦の都市論

松本・小林の戦国城下町の復原は、いずれも土佐の『長宗我部地検帳』という一次史料をもとにしていた。小林は、明治期の地籍図をも加えて復原を行ったが、地籍図は地検帳の記載内容の位置比定のための補助資料であった。両者に共通するのは、空間復原に使用する資料に対する慎重な態度である。しかし、このような一次資料に立脚した空間復原は、資料的制限の大きい土佐以外の地域では適用することができない。松本の研究においても、土佐と比較された他国の事例は、

相変わらず地点表示レベルの復原に基づくものであり、土佐と同じスケールの復原による空間の比較はなされなかった。ここに、方法的な行き詰まりがあった。

しかし、一九八〇年代以降になると、このような状況が一変し、中世都市ブームともいうべき学際研究の隆盛期を迎えることになる。その火付け役で、牽引役ともなったのが、一九七〇年代半ば以降に発表された網野善彦による一連の都市論^⑮であることは論を待たない。網野の登場は、高度経済成長期以降の歴史学における社会史の進展と軌を一にしていた。網野は、中世社会においては、非農業民が日本列島において活発な経済活動を行っていたことを重視し、非農業民の流動的な活動の結節点を中世における「都市的な場」としてとした。この「都市的な場」とは、領主権力の封建的支配の及ばない「無縁」の特質を帯びた空間であり、「無縁」とは古来（未開社会）からの根強い慣習、法理、集団的社会的な規制力に支えられた原理であるという。このような「都市的な場」の定義は、それ以前の封建都市論とは正反対の方向にあることが分かる。網野は、封建都市論で取りあげられてきた封建領主の支配する城下町以外の集落を、中世特有の都市であるとして積極的に認定した。この網野都市論により、原田以来の長きにわたる封建都市論の枠組から脱して、中世都市の空間を解釈できる可能性が開かれたとみることができよう。

網野は、「無縁」の特質は、市、中洲、河原、野山、関、泊、津、渡、道路といった境界的な空間に特徴的に現れるとしたので、このような場所に立地する多くの集落が、中世都市研究の分析の組上にあげられることになった。これらの集落について、空間を復原するに十分な一次史料が残存していることは稀である。そのため、必然的に、一次史料だけでなく、近世地誌や近世絵図、地名、伝承、石造物といった二次史料や文字以外の資料も積極的に復原のための資料として採用された。さらに、同時期の一九八〇年代から九〇年代にかけては、バブル経済の影響もあって、地方都市において都市再開発に関わる発掘調査が増大した時期である。このような中で、鎌倉^⑯や草戸千軒^⑰、一乗谷^⑱といった中世都市遺跡で発掘調査が大きく進展し、文字史料からは知ることのできない多くの新事実が次々と考古学から提示されたことも、同時代の

文字史料に固執しない景観復原の方法の普及を促進した。この研究段階において対象とされた都市は、上記の発掘調査の進んだ都市遺跡に加えて、博多^⑩、多賀城・松島^⑪、遠江国府など、流通の拠点となった都市や古代からの系譜をもつ都市も多く、封建都市論段階とは対照的に、鎌倉期から室町期にかけての都市も、中世都市研究の対象として取りあげられるようになった。

現代の開発や文化財行政と不可分な発掘調査によるめざましい成果は、社会的にも中世都市遺跡の存在を広く知らしめることにつながった。網野や石井進らを中心として、文献史学、考古学、民俗学による共同研究が積極的に行われるようになり、その成果は多くの研究書の刊行、中世都市研究会や帝京大学山梨文化財研究所における研究会やシンポジウム、講演会の開催によって、学会内のみならず一般社会にも広く公開された。そして、このような学際研究を通じて、文献史学の理論と考古学による発掘調査成果は、相互補完的に結びつけられ、網野が見出した数多くの中世都市とその「無縁」性が、現実に見える具体的な空間として表現されることになったのである。この段階を中世都市論の学際研究の萌芽期と捉えることができる。

それでは、この研究段階においては、どのような空間が中世都市に求められたのだろうか。網野都市論において、中世における「都市的な場」を判定する条件としては、その場所が、「無縁」性を帯びた非農業民の担う経済機能や流通の結節機能を有しているかどうかという点が大い。そのため、そこで求められたのは、町屋や交易管理者・有力者の館などの経済施設が一定程度集中する空間形態、ないし交易を行う市庭や港湾施設を備えた景観であったと思われる。

この段階では、多様な資料を総合して諸施設の位置比定が行われたが、中でも重視された復原資料は、考古学の発掘調査成果であった。ここでは、文献史料による位置比定という点データと、考古学の遺構という小規模な面データを組み合わせ、都市空間全域の復原図が提示された。しかし、点と小規模な面の組み合わせでは、いずれの資料からも確認できない「空白地」が残される場合も多く、都市空間全域を同レベルの資料を同じ方法論を用いて均質に復原することは現実

的には難しい。このとき、都市空間全体の説明のために、領主権力の支配の強い「中心」領域と、網野の指摘する「無縁」の論理の卓越する「周縁」空間とから成る同心円構造という、模式図的でやや抽象的な民俗学的空間理解が採用されることもあった。^②つまり、中世都市空間は、発掘調査で裏付けられる部分は、個別の遺構を問題とするミクロなスケールで具体的なレベルで復原・把握されるのに対し、都市空間全域を見通すマクロなスケールでは、抽象的かつ模式図的なレベルで理解されている。

この研究段階での都市空間には、そこが「都市」ないし「都市的な場」として認定するに十分な属性を備えていることを示すことが期待された。封建都市論段階と比較すると、空間を類型化し、都市の発達段階といった時期差や変遷を積極的に見出すとする姿勢はあまり見られない。その結果、都市空間構造の復原と説明がやや静態的になる傾向にもあったと思われる。

(3) 中世国府・府中

網野善彦の都市論の登場とはほぼ同時期に、主として文献史学において、研究の関心が寄せられていたのが、中世前期の地方政治都市の国府ないし府中である。中世国府・府中が都市として注目された理由の一つに、文献史学における荘園公領制論の高まりがある。中世国府・府中は、荘園公領制という社会構造の中で、各地に展開する広大な公領と京都・鎌倉とを結ぶ政治・経済の結節点として機能した都市として位置づけられた。^③そして、中世国府・府中は、荘園公領制という中世的な社会構造に対応すべく、古代国府の再編を経て成立した都市であり、国衙を統制する在地領主の支配が強く及び、それは空間にも大きな影響を与えたとする見解が一般的である。^④例えば、小川信は、中世国衙を統制する領主権力の支配形態が国府の空間構成に反映したと考え、府中を中世の領主制形成に対応する一国支配の新しい中心領域であるとする。^⑤また、権力による行政単位に基づく空間編成や都市法の発布を経た都市領域として、国府・府中をとらえる見解もあるが、

この見解も在地領主の国府空間に対する影響力を高く評価している。

一方で、在地領主以外の都市民による空間形成を評価する見方もある。義江彰夫は、国府に国衙在庁官人が全面的に掌握した排他的の一円領域を想定するが、その縁辺には在庁名や細工名、市・津・泊が展開するとし、縁辺部の都市民の自立によって、国府の都市構造が変化する事例を指摘した。^{②⑦} 斉藤利男は、国府の周縁にある都鄙間交通の結節点に、経済活動を行う都市民が集い、領主は府中の内部にこのような空間を包摂しながらも、中世を通じて完全な支配下におくことはできなかったとする。^{②⑧}

斉藤は、このような在地領主と都市民の存在形態によって規定された中世国府・府中の空間を復原し、官衙・居館地区を中心とし、その周辺に分散する宿・市・津が大路によって結ばれた複数の機能を併せ持つ、複合的・分散的な景観を提示した。^{②⑨} その一方で、領主権力の空間統制力が卓越する「中心」と、領主支配から一定の自由を獲得した都市民の集まる「周縁」という二重の構造も想定されている。^{③①} この想定には、前節で述べたマクロスケールでの抽象的・模式的な空間構造理解も影響している。

このうち前者の空間は、諸施設や市・津の分布と、それらを結びつける道路という具体的な都市空間構成要素の位置比定に基づいた空間形態を意味している。一方、後者の空間は、領主権力の支配統制の度合を指標として分類された、より抽象化された空間領域を指す。両者は空間の抽象度が異なる見解であると言える。しかし、この差についてはあまり意識されてこず、現実の可視的な景観を説明する見解として二説が併存してきた。この問題に関して筆者は、前者を現実の形態・機能から成る空間構造として、後者を領主権力の空間認識として捉え直すことを通じて、空間概念の整理を試みたことがある。^{③②}

以上のように、中世国府・府中の空間については、荘園公領制論を背景として、在地領主の支配が卓越する領域と都市民の集散する市・津・泊とが併存する景観が想定されてきた。その空間は、諸施設の具体的な位置比定という方法によっ

て復原されると、複合的・分散的な空間構造として提示される。一方、在地権力の支配領域という抽象的なレベルで理解されると、「中心」―「周縁」という同心円的構造として解釈される。このように、マクロスケールの空間理解において、複合・分散説と、「中心」―「周縁」説という空間の抽象度の異なる二つの見解が併存しているのが特徴である。このうち後者に関しては、私見では、在地領主の空間認識というレベルであった可能性が高いと考えている。

(4) 中近世移行期都市論

封建都市論という後ろ盾を弱めた戦国城下町研究は、一九八〇年代後半以降、小島道裕の戦国期・織豊期城下町研究^③によって新段階を迎えた。小島は、戦国期城下町を、戦国大名の強い支配の及ぶ館・家臣屋敷・直属商工業者の屋敷地から成る空間と、戦国大名から一定の自由を獲得した市場・町空間とが併存する二元的な空間構造であったとした。そして、織田信長の安土城下町建設以降、戦国期城下町の二元構造は否定され、統一権力によって空間を一元化された統一的・画一的な織豊期城下町が建設されるようになるとする明快な変遷過程を主張した。

小島の見解をふまえた考古学の前川要は、戦国期・織豊期城下町の空間の変遷過程をモデル化し、長方形街区と短冊形地割のセットの出現を織豊期城下町成立の指標として見出した。^④城郭史学の千田嘉博は、一六世紀第二四半期頃に山城に軍事・政庁機能が集中する戦国期拠点城郭が誕生することや、織豊期城下町の中核をなす城郭が外枳形虎口の出現をもって特徴づけられることを論じた。^⑤このような小島・前川・千田の研究においては、二元的な空間構造であった戦国期城下町を一元的・求心的な構造へと大きく転換させた織豊期城郭・城下町の画期性が強調され、それが地方に伝播し、全国で同一の形態が模倣されるようになることが指摘された。

小島らの戦国期城下町論は、その系譜を辿る方向へも深化し、その前段階として、守護所・守護城下町にも目が向けられるようになった。封建都市論段階の松山宏・今谷明の研究と比べて、この段階の守護所・守護城下町研究においては、

具体的な都市内部空間スケールの景観復原が進み、守護所・守護城下町は、守護館を中心とした方形館の集合体によって構成されることが明らかになった。^⑤近年は、さらに発掘調査が進展し、より詳細な景観復原が可能となったことを受け、守護城下町から戦国期城下町への空間変遷モデルが考えられ、また守護城下町が複数の直線道から街区が構成される「方形・方格プラン」とも呼ぶべき実態であったことも指摘されている。^⑥

小島らの提示した二元から一元へという城下町の単線的な発展段階説に対しては、様々な批判もある。市村高男は、東国の戦国期城下町の事例をふまえ、戦国期城下町は広い範囲に分散する都市構成要素がルースに統合された多元的な空間構成であったことを主張した。^⑦近年の発掘調査事例をふまえた仁木宏は、戦国期城下町の空間構造を小島らが想定するような二元論では説明できない地域も多く、多様性こそがこの時期の空間構造の特徴であるとする。^⑧福島克彦は、織豊系城郭・城下町が全国一律に画的・一元的な空間構造を形成したとする見解に対し、地域の状況によって受容の実態は異なることを示した。^⑨さらに、玉井哲雄や伊藤裕久、仁木宏は、畿内寺内町における住民による都市建設の手法や志向が織豊期城下町に与えた影響を高く評価しており、ここでは、城下町研究は、同時期の寺内町などその他の集落構造との関連をふまえて理解されるべきであることが主張された。このように戦国期・織豊期城下町研究は、寺内町や地域の集落の空間構造も含めて幅広い視点から都市空間の変遷過程を動態的に把握する中近世移行期都市研究へと発展しつつあると言える。

中近世移行期都市論に特徴的なのが、景観復原の方法である。既に網野都市論段階で、同時代の文献史料のみならず、発掘調査の成果や伝承、地名、近世地誌・絵図といった様々な資料を総合的に用いて、都市構成要素の位置比定が行われる学際的手法が定着していたが、さらに中近世移行期都市論段階では、近代初期に作成された地籍図を積極的に利用した点の特筆される。^⑩発掘調査の多くは、市街地開発や建替に伴う面積の狭い小規模な調査であり、城下空間全体の中で調査地を位置づけることが必要とされてきた。発掘調査を行っていない空間に何があったのかを推定するために、地籍図は有

効な資料として、積極的に復原に利用された^⑭。

地籍図はほぼ全国的に作成されたという点で汎用性の高い資料であるため、地籍図を利用することで、発掘調査の有無に制限されることなく、事例とする城下町を選定することが可能となった。さらに、地籍図を用いて地割の形態分析を行うことで、城館のみならず、武家屋敷、町、惣構といった多様な都市構成要素の空間が復原された。地籍図という地図資料から、城下町の空間構造を推定することは、面としての空間を復原できるという点で有効な方法である^⑮。こういった復原方法は、他の中近世移行期都市にも応用可能な方法であり、その後の事例研究の促進に大きく貢献した。

中近世移行期都市論においては、この時期に大きな転換を遂げた空間構造の実態を明らかにし、その背景にある政治・社会・宗教・経済構造の変化を説明することが最大の論点となっている。ここでは、封建都市論段階のように、館・武家屋敷・町の三要素の相対的位置関係と凝集度のみを問題とするのではなく、それらに加えて城郭・道路・惣構・河川といった都市構成要素の都市空間全体に占める位置と形態パターンの復原をふまえて、それらの有機的結合関係とその変遷を検討する点に特徴を見出すことができる。このようなより包括的な景観復原を行うために、網野都市論段階以降の資料の総合化という方法を用いられるが、とりわけ地籍図という空間情報が重視された。ここで復原された空間は、地籍図や都市計画図をベースとした大縮尺の地図上で示される現実に即した具体的な空間形態であり、その事例の蓄積の上にモデルが構築されつつある。また、中近世移行期都市論は、一五世紀末から一七世紀初頭という比較的短いスパンにおける都市の変遷過程を問題とする動態的な分析である点にも特徴がある。

(5) 都市空間史における空間モデルの構築

ここまで述べてきたような研究を経て、多くの中世都市の空間が復原され、事例研究が蓄積されてきた。しかし、中世国府・府中について斉藤利男が、戦国期城下町について市村高男や仁木宏が指摘したように、中世都市空間の特徴は多元

性にある。この多元的な空間を比較し、中世を通じて統一的に説明する見解の提示は、かえって困難になったように思われる。中世国府・府中や、中近世移行期都市のそれぞれについて、空間構造の模式的理解がなされても、両者を連続して、中世都市空間の通史を叙述する試みはなされてこなかった。

このような状況において、中世都市空間を通史的に説明する概念として、一九九〇年代の初めに提示されたのが、伊藤毅による「境内」と「町」という空間モデルである。「境内」は、寺社や武家、権門といった中核となる領主をもち、核を中心とした同心円状の「面」集合を形成し、重層的・求心的・閉鎖的な空間を構成するという。一方、「町」は、原則として核を持たず、道を中心とした「線形」の集合形態となり、道に沿って、比較的均等な単位が連続する開放的な空間であるとする。そして、「境内」が一円性を主張する論理を持ち、定着する傾向にあるのに対し、「町」は「境内」にとつて境界となる性格を有し、流動的な集合体であるとした。そして伊藤は、多元的でとらえどころのない中世都市空間を、「境内」と「町」という二つの特徴的な空間概念を組み合わせることで統一的な説明を行っている。伊藤の空間モデルによる都市空間の解釈は、現在でも広く支持されている。

伊藤の議論を発展させ、古代から近代に至る都市空間の歴史を、「境内」と「町」という概念を用いて総括したのが、『図集 日本都市史』^⑦であった。ここでは、「境内」系都市として古代都城が位置づけられ、都城が崩壊し中世都市が形成される過程が「境内」から「町」の誕生として説明される。中世都市は、「境内」と「町」とが多様な形態で結びついた多核複合的な空間であるが、「境内」の中に「町」を取り込むことによって新しく誕生したのが近世城下町であるとする。

宮本雅明は、伊藤の見解をふまえて、近世城下町の成立過程を跡づけた。^⑧宮本は、公権力によって中世都市の多元的な空間が解体・再編され、惣構や町から城郭を見通すヴィスタの設定によって、一元的な公権力の求心性を志向する惣郭型の近世城下町が成立したとする。しかし、その後の城下町では、求心化からの脱却が進行し、開放的で均質性を志向する

マチ空間が発展し、町郭外型の城下町へと展開したと説明する。そして、この過程を伊藤の概念を用いて説明し、惣郭型城下町の形成とは、寺社・城館の小「境内」に捕捉されていた「町」を「境内」から開放し、城を核とした単一の大「境内」へ「町」を統合する過程であるとし、町郭外型城下町の形成を、城の「境内」から「町」が解放される過程、もしくは「境内」から「町」が脱却する過程であると位置づけた。

都市空間史段階における、「境内」と「町」という二つの空間モデルで、多元性を特徴とする中世都市空間を読み解くユニークな視角は、これまで述べてきた、どの研究段階よりも空間を抽象化している。「境内」と「町」という二つの空間モデルは、町屋の表層というミクロスケールの空間的現象から、都市内部空間というマクロスケールの空間までを説明可能とする空間スケールを超えた伸縮可能な概念である。このとき、比較やアナロジーといった手法によって、空間が解釈されていることも特徴的である。

(6) 空間概念の相違と問題点

以上に整理したように、中世都市研究史においては、同じ空間という概念を用いながらも、それぞれの研究段階における問題設定に応じて、異なる空間分析の方法が採用された結果、復原された空間の構成要素、スケールと抽象度が研究段階によって異なっていたと考えられる。例えば、網野都市論や中世国府・府中研究によって明らかにされた中世前期都市の空間と、封建都市論や中近世移行期都市論によって考察の進んだ戦国・織豊期の城下町の空間とは、分析方法が異なっているため、復原された空間の構成要素やスケールが合致しない。また、中世国府・府中における「中心」――「周縁」から成る同心円的構造と都市空間史の「境内」――「町」の空間モデルとは厳密には対応せず、抽象度ないし抽象化の方法が異なっていると思われる。それでは、空間に対する研究視角の差に起因する空間概念の相違は、どういった問題を招来する可能性を有しているのだろうか。

ここでは、現在の中世都市研究のうち、空間に着目する研究の主流となっている中近世移行期都市論と都市空間史研究における空間概念の相違とそこから派生する問題を検討してみよう。中近世移行期都市論においては、都市内部空間を「面」として捉え、地図資料を含めた資料の総合化によって、大縮尺の地図に図化できるレベルまで、空間形態の復原が精緻化されてきた。そして、復原された諸施設・道路等の有機的結合関係の検討を通じて、空間構造が論じられている。中近世移行期都市論は、具体的な空間形態・機能の復原によって都市空間構造を示す方向に向かう分析の到達点であると評価できる。

一方で、都市空間史研究では、「境内」―「町」という空間モデルが構築されている。この空間モデルは、多様な空間・社会の要素を、「境内」ないし「町」にアナロジーすることで、古代から近代まで、ミクロからマクロに至るまで、時間とスケールを超えて、都市空間を二つの空間モデルの多様な結びつきのパターンとして説明する。都市空間を抽象的レベルで把握し解釈する方向の研究の到達点は、ここにあると言えよう。

このように、二つの研究動向は、異なる空間レベルの方向へそれぞれ進化していると言える。もちろん、後者の抽象的な空間モデルによって、前者の具体的な空間形態・機能を解釈することは可能であるし、そういった研究もみられる。しかし、抽象度の高いモデルに適合させることによって、モデルから捨象される空間形態・機能が生じることが避けがたい。それは、その空間形態・機能を規定する地域の社会構造の一部を捨象することにつながる可能性がある。しかし、中近世移行期都市論においては、具体的な空間形態・機能を産み出した地域固有の社会構造の解明が研究の目的の一つであり、抽象化の進んだモデルの無限定な援用は、そのような目的への直接の貢献にはなりにくい。このような二つの研究段階における空間概念の相違は、十分に認識されていないか、認識されてはいても、それを論理的に接合する試みはなされておらず、それぞれの研究が別々の方向へ進化し続けているように思われる。ここから、特定の問題設定の枠内での議論に合わせて、その「副産物」として復原された空間は、別の問題設定を担った研究によって、無批判に利用することは危険で

あることが示唆される。

前節までに示したように、これまでの中世都市研究においては、学際研究を盛んに行う中で、特定の問題設定が、学問分野の垣根を超えて広く受け入れられ、その問題設定に即した空間が模索される傾向にあった。換言すれば、それぞれの問題設定の背景となった社会構造論を説明するために適切な空間復原が目されてきたとも言える。社会構造論を研究動機とせず、純粹に空間形態と機能の復原のみの空間分析を実証的に行う研究は、問題設定の積極的な共有を行う学際研究では少ない。むしろ、空間形態と機能の復原に終始する研究は、空間に固執し、その類型化を自己目的化しているとして批判される傾向が強い。これは、中世都市研究が、空間と社会をほぼ同義のものとし、両者の差異をあまり意識せずに把握する姿勢とも無関係ではないだろう。

このように見えてくると、学際研究においては、特定の研究段階の枠を超えて、既存の研究成果である空間構造を集成して、中世都市空間の類型化と中世を通じてその変化を描き出すことは、事例研究の蓄積の厚さに比して、思いの外難しいことが分かる。さらに、封建都市研究は戦国期を、国府・府中研究では中世前期を主たる研究対象時期に設定しているように、それぞれの研究段階において、対象時期がある程度限定される傾向があることを考慮すると、中世を通じた都市空間構造の総括を行うとき、時期の異なる空間研究の成果を単につなぎ合わせるだけでは、復原レベルや抽象度・スケールの異なる空間のパッチワークとなってしまう危険性がある。これが、現在の中世都市空間研究に内在する問題点であると考えられる。

それでは、この問題点を解決するためには、どのような方法が有効なのであろうか。それは、従来の研究における空間概念の精査と峻別を行った上で、異なる空間概念がどのような相互関係にあるかを論じることであろう。そもそも空間には、スケール、形態、機能、構造といった多様な位相が重層的に存在している。このような空間の重層性は、人文地理学の基本的な空間への研究視角でもある。さらに、歴史地理学においては、伝統的に、実在的世界 (real world)、主体的世

界 (imagined world)、抽象的世界 (abstract world) という二つの領域に空間を分けて論じる視角がある。このような空間の重層性に着目し、それぞれの位相の空間の相互関係を描くことができれば、社会構造論に発する問題設定の枠内からひとたび空間を解き放し、空間そのものの理論化による新しい空間構造論の可能性を拓くことにつながるだろう。その上で改めて、空間構造と社会構造との相互規定関係を問い直すことも、空間に焦点をあて、その解明を標榜する以上、中世都市研究の一つの方向となりうるのではないだろうか。

次章では、このような見解をもとに、研究蓄積が厚い戦国期・織豊期城下町研究を例として、その空間の重層性に注目し、異なる位相に峻別して論じる試みを行う。そして、この試みにより、どのような空間構造論を描くことができるのかを検討する。

- ① 原田伴彦『中世における都市の研究』講談社、一九四二。
- ② 原田伴彦『日本封建都市研究』東京大学出版会、一九五七。
- ③ 原田伴彦『日本封建制下の都市と社会』三一書房、一九六〇。
- ④ 豊田武『日本の封建都市』岩波書店、一九五二。
- ⑤ 魚澄惣五郎編『大名領国と城下町』柳原書店、一九五七。地方史研究協議会『日本の町』雄山閣、一九五八。同編『封建都市の諸問題』雄山閣、一九五九。
- ⑥ 松山宏『日本中世都市の研究』大学堂書店、一九七三。同『守護城下町の研究』大学堂書店、一九八二。
- ⑦ 今谷明『畿内近国に於る守護所之分立』国立歴史民俗博物館研究報告八、一九八五。同『守護所の性格と機能』国史学一四三、一九九一。同『守護と交通・交易』（網野善彦責任編集『朝日百科・日本の歴史別冊 歴史を読みなおす六 平安京と水辺の都市、そして安土』朝日新聞社、一九九三）。
- ⑧ 自由都市論の動向は、佐々木銀弥『日本中世都市の自由・自治研究をめぐって』（社会経済史学三八―四、一九七二）に整理されている。
- ⑨ 前掲注①。
- ⑩ 前掲注①。
- ⑪ 小牧実繁『先史地理学研究』内外出版印刷、一九三七。
- ⑫ 藤岡謙二郎『景観変遷の歴史地理学的研究』大明堂、一九七八。
- ⑬ 松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究 増訂版』吉川弘文館、一九六七。
- ⑭ 小林健太郎『戦国城下町の研究』大明堂、一九八五。
- ⑮ 代表的な著作として、網野善彦『中世都市論』（『岩波講座日本歴史七中世三』岩波書店、一九七六）や同『増補 無縁・公界・楽』（平凡社、一九九六）が挙げられる。
- ⑯ 石井進・大三輪龍彦編『よみがえる中世三 武士の都鎌倉』平凡社、一九八九。鎌倉考古学研究所編『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部、一九九四。馬淵和雄『武士の都 鎌倉——その成立と構想をめぐって——』（網野善彦・石井進編『都市鎌倉と坂東

の海に暮らす」新人物往来社、一九九四。河野真知郎「中世都市録倉」講談社、一九九五、など。

- ①⑦ 松下正司編「よみがえる中世八 埋もれた港町 草戸千軒・頼・尾道」平凡社、一九九四。志田原重人「草戸千軒にみる中世民衆の世界」(網野善彦・石井進編「内海を躍動する海の民」新人物往来社、一九九五)。

- ①⑧ 水藤真・小野正敏編「よみがえる中世六 実像の戦国城下町 越前一乗谷」平凡社、一九九〇。小野正敏「戦国城下町の考古学」講談社、一九九七など。

- ①⑨ 川添昭二編「よみがえる中世一 東アジアの国際都市 博多」平凡社、一九八八。小林茂・磯望・佐伯弘次・高倉洋彰編「福岡平野の古環境と遺跡立地」(九州大学出版会、一九九八など)。

- ②⑩ 入間田宣夫・大石直正編「よみがえる中世七 みちのくの都 多賀城・松島」平凡社、一九九二。

- ②⑪ 網野善彦・石井進編「中世の都市と墳墓」日本エディタースクール出版部、一九八八。網野善彦・石井進・平野和男・峰岸純夫編「中世都市と一の谷中世墳墓群」名著出版、一九九七。

- ②② 石井進「中世都市録倉研究のために——大三輪龍彦氏の近業によせて——」三浦古文化二六、一九七九。同「都市録倉における『地獄』の風景」(御家人制研究会編「御家人制の研究」吉川弘文館、一九八二)。同「中世都市としての録倉」(佐々木潤之介・石井進編「新編日本史研究入門」東京大学出版会、一九八二)。

- ②③ 齊藤利男「中世東国の地方都市」中世の東国三・四、一九八二。同「荘園公領制社会における都市の構造と領域——地方都市と領主制——」歴史学研究五三四、一九八四。

- ②④ 義江彰夫「中世前期の都市と文化」(講座日本歴史三・中世一)東京大学出版会、一九八四。同「中世前期の国府——常陸国府を中心に

——」国立歴史民俗博物館研究報告八、一九八五。同「平安末・鎌倉時代の国府・府中——常陸国府を中心に——」国史学一四三、一九九一。前掲注②③。

- ②⑤ 小川信「中世の備中国衙と惣社造営」國學院雑誌八九一、一九八八。同「下野の国府と府中について」栃木史学二、一九八八。同「諸國の府中について」国史学一四八、一九九二。同「筑後国府の変遷と一宮高良社(Ⅰ)」政治経済史学三二、一九九二。同「筑後国府の変遷と一宮高良社(Ⅱ)」政治経済史学三二、一九九二。

- ②⑥ 保立道久「町の中世の展開と支配」(高橋康夫・吉田伸之編「日本都市史入門Ⅱ町」東京大学出版会、一九九〇)。五味文彦「文献史学からみた都市研究」(中世都市研究会編「都市研究の方法」新人物往来社、一九九九)。

- ②⑦ 義江彰夫「国府から宿町へ——一の谷遺跡を手懸りに見る中世都市見付の構成と展開——」東京大学教養学部人文科学科紀要一六「歴史と文化」八七、一九八八。

- ②⑧ 齊藤利男「古代・中世の交通と国家」(朝尾直弘他編「日本の社会史二 境界領域と交通」岩波書店、一九八七)。同「越後府中と直江の津——中世都市の二つの顔——」(渡辺信夫編「近世日本の都市と交通」河出書房新社、一九九二)。

- ②⑨ 前掲注②③。

- ③⑩ 前掲注②④、②⑤。

- ③⑪ 山村亜希「中世前期都市の空間構造と都市像」人文地理五四一六、二〇〇二。

- ③⑫ 小島道裕「戦国期城下町の構造」日本史研究二五七、一九八四。同「織豊期の都市法と都市遺構」国立歴史民俗博物館研究報告八、一九八五。同「戦国・織豊期の城下町——城下町における「町」の成立——」(高橋康夫・吉田伸之編「日本都市史入門Ⅱ町」東京大学出

- 版会、一九九〇。同「戦国期城下町から織豊期城下町へ」（都市史研究会会編『年報都市史研究』一 城下町の原景）山川出版社、一九九三。
- ③③ 前川要「近世城下町発生に関する考古学的研究」ヒストリア二二、一九八八。
- ③④ 千田嘉博「織豊系城郭の形成」東京大学出版会、二〇〇〇。
- ③⑤ 金子拓男・前川要編『守護所から戦国城下へ——地方政治都市論の試み——』名著出版、一九九四。
- ③⑥ 仁木宏「寺内町と城下町」（有光友學編『日本の時代史十二 戦国の地域国家』吉川弘文館、二〇〇三）。同「室町・戦国時代の社会構造と守護所・城下町」（守護所シンポジウム@岐阜研究会編『守護所・戦国城下町を考える』二〇〇四）。
- ③⑦ 市村高男「戦国期東国における権力と都市」（同『戦国期東国の都市と権力』思文閣出版、一九九四）。
- ③⑧ 前掲注③⑤。
- ③⑨ 福島克彦「織豊系城郭の地域的展開」（村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社、一九九〇）。同「織豊期における城郭・城下町の地域的展開」ヒストリア一四二、一九九四。
- ④① 玉井哲雄「近世都市空間の特質」（吉田伸之編『日本の近世九 都市の時代』中央公論社、一九九二）。同「都市の計画と建築」（『岩波講座日本通史十一 近世』岩波書店、一九九三）。
- ④② 伊藤裕久「中世集落の空間構造」生活史研究所、一九九二。
- ④③ 仁木宏「御土居」への道」（日本史研究会編『豊臣秀吉と京都』文理閣、二〇〇一）。同「近世社会の成立と城下町」日本史研究四七六、二〇〇二。同「戦国期摂河泉都市のオリジナリティ」ヒストリア一八六、二〇〇三。
- ④④ 千田嘉博・小島道裕・前川要編『城館調査ハンドブック』新人物往来社、一九九三。
- ④⑤ 前川要「都市考古学の研究——中世から近世への展開——」柏書房、一九九一。
- ④⑥ 山村亜希「中世都市の景観復原と地籍図」愛知県立大学文学部論集五四（日本文化学科編八）、二〇〇六。
- ④⑦ 伊藤毅「中世都市と寺院」（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ空間』東京大学出版会、一九八九。同「境内と町」（都市史研究会編『年報都市史研究』一 城下町の原景）山川出版社、一九九三。同「宿」の二類型（五味文彦・吉田伸之編『都市と商人・芸能民』山川出版社、一九九三）。
- ④⑧ 高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集 日本都市史』東京大学出版会、一九九三。
- ④⑨ 宮本雅明「近世初期城下町のヴィスタに基づく都市設計——その実態と意味——」建築史学四、一九八五。同「近世初期城下町のヴィスタに基づく都市設計——諸類型とその変容——」建築史学六、一九八六。同「都市空間の均質化と近世都市の建設」（中世都市研究会編『都市をつくる』新人物往来社、一九九八）。同「象徴性と公共性の都市史——日本近世都市の歴史・空間・景観——」（鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人編『近世都市の成立』東京大学出版会、二〇〇五）。同「豊臣政権の空間設計と都市造形」（同『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版、二〇〇五）。
- ⑤① 有園正一郎・遠藤匡俊・小野寺淳・古田悦造・溝口常俊・吉田敏弘編『歴史地理調査ハンドブック』古今書院、二〇〇一。

Ⅲ 中世都市空間の重層性

(1) 空間概念の峻別

空間概念の相違を認識した上で、その意味する内容についての検証を行い、異なる空間概念相互の関係を論理的に説明する試みは、これまでほとんど行われてこなかったといつてよい。このような状況に対し、筆者は先述したように中世国府・府中研究において、空間概念の峻別を行った^①。ここで簡単に内容を再論すると、中世国府・府中について先行研究の示す、分散的な諸施設の立地パターンとそれらが有機的なつながりをもって結びつく空間構造を、現実の空間構造であると考えた。そして、領主権力の館や政庁を「中心」として、「周縁」に市・泊・津が展開する同心円的構造の空間を、在地領主権力の空間認識であると推定し、現実の空間構造と領主権力の空間認識との乖離に、中世国府・府中の空間的特質があると考えた。時代が下るにつれ、その乖離は徐々に解消されていくという都市空間の変遷過程を想定している。

このように、中世国府・府中研究における空間概念を整理し、異なる概念相互の関連を論理的に説明する上では、領主権力の空間認識をその媒介項とすることが有効であると考ええる。このような空間認識の分析は、これまでの研究では欠落していた方法論と言つて良いだろう。現実の空間構造と領主権力の空間認識という空間の重層的な位相に注目するとき、従来の研究とは異なる視点から、中世都市の空間構造の変遷過程を論じることが可能となる。

それでは、中世国府・府中以外の都市も、空間認識をキーワードとすることで、重層的な空間の変遷過程を描くことができるのだろうか。それとも、これまでの研究では見落とされてきた、別の視点ないし方法論の設定が可能なのだろうか。本稿では、戦国期・織豊期城下町を事例として、検討を進めることにしたい。

中世国府・府中の空間形態は、戦国期・織豊期城下町に比べて、規則性を見出しにくく、分散的である。そのため、復

原した空間形態の中に、特定の主体による都市空間全体に及ぶ統一的な都市建設や改変の痕跡を見出すことは難しい。ましてや、そこから在地領主の空間認識をよみとることは不可能に近い。そこで、筆者は、先の研究では、作成主体が明確な同時代絵図や史料における都市景観の描写を作成主体の空間認識とみなして分析するという、空間認識への直接的なアプローチを行った。しかし、この方法は、都市景観を描く同時代絵図・史料が残っている場合にしか通用しない。

一方、戦国期以降の都市空間は、中世国府・府中と比べると、諸施設の集中度が増し、程度の差はあれども、一般的には人為的な空間の構築がより広域で行われている。そのため、空間形態や機能を慎重に分析することによって、領主権力や都市民による都市建設や改変の痕跡を見出すことができる。特定の主体が建設・改変した都市形態は、その主体の空間認識を一定程度反映したものとして捉えることができるだろう。むしろ、中世前期と同様に、一次資料から空間認識を抽出する直接的なアプローチが最も望ましいが、戦国期以降の中世都市においては、同時代に作成された都市図や都市全体の景観を描出する言説はほとんどない。つまり、戦国期以降の都市については、復原した空間から、領主権力や都市民によって建設ないし改変された空間形態と、その背後にある彼らの都市計画と空間認識ないし理念を推定するという間接的な方法が想定される。この方法は、精緻な復原さえ可能であれば適用できる点で、中世国府・府中において空間認識を抽出した方法よりも汎用的である。

このような空間構造から、権力や住人の都市計画や空間認識を読む方法は、戦国期・織豊期城下町研究においては、さほど目新しいものではないだろう。なぜなら、封建都市論段階から城下町研究が一貫して持ち続けている権力と都市空間との関係を問う問題意識においては、都市空間の中で、どこが権力による創出や改修を受けた箇所、どこが都市民によって形成されたのかという問いは、当初より基本的な問題意識として内在していたためである。しかし、こういった問題意識が、現実の空間構造と領主権力による都市計画上の空間との相違を区分し、現実の空間構造における都市計画の貫徹度を検討するという方法論として明確化されたことはなかった。むしろ、二つの空間はしばしば混同されてきたとも言え

る。この混同を顕著に示すのが、これまでの研究におけるプランという概念に込められた意味の不統一ではないかと思われる。そこで、中近世移行期の城下町研究において、プランという用語がどのように使用されてきたのかを概観しておく。

中世から近世への城下町の変容過程を類型化し、そこに城下町プランの用語を用いたのは矢守一彦であった^②。矢守は、都市を人体にたとえて、その器官たる街路・街区や諸施設の分布とその組み合わせのパターンを都市プランと呼んだ。一方で矢守の研究は、多くの絵図が残る近世城下町に立脚したものであり、都市プランを西欧における都市図や設計図に近い概念であるとも説明している。このように矢守の都市プランという概念には、二つの意味が内包されていたが、これらが矛盾なく併存していた理由は、矢守が研究対象とした近世城下町においては、実際の城下町の空間構造と絵図の描写とがほぼ一致するとみられていたためであろう。しかし中世都市は、筆者が国府・府中について示したように、空間構造と絵図の描写内容が必ずしも一致しない点に大きな特徴と都市空間史上の意味がある。つまり、都市プランの用語は、中世都市研究に導入されたとき、現実の空間構造と設計図としての空間という二つの異なる意味を同時に包含する曖昧な概念となる危険性を潜在させていた。

矢守と同じく、織豊期から近世初期にかけての城下町の空間類型を検討した宮本雅明は、矢守の主張する城下町プランに現実の空間構造の変容という意味が含まれていることを批判し、城下町の計画当初の理念や空間的志向性を城下町プランにとらえている^④。ここでのプランとは、大名権力による都市計画やその都市計画を要請した社会構造という意味で用いられている。一方、小島道裕^⑤、千田嘉博^⑥、仁木宏^⑦、福島克彦^⑧らは、城郭・城館、武家屋敷、市町、道路、惣構などの有機的結合によって構成される現実の空間構造をプランと考えているように思われる。

このように、中近世移行期の城下町研究におけるプランという用語には、権力による都市計画・理念ないしその手法と、現実の都市空間の骨格という二通りの意味が併存している。研究者はそのいずれかの意味に対しプランという用語をあて

ているものの、両者の区別は明示されていない。矢守の近世城下町論に立脚した都市プランの概念は、戦国期・織豊期城下町の空間解釈に適當かどうかの吟味が十分に行われないうまま、用語のもつイメージが大きな影響を与えている可能性がある。そこで、次節以降では、このような点に十分注意しつつ、近年の研究によって提示された戦国期・織豊期における城下町空間の変遷過程を、現実の空間構造と領主権力によって計画された空間との相違という観点から読み直す試みを行ってみたい。

（2）現実の空間構造と領主権力の都市計画

① 守護城下町

一五世紀後期から、各地で遺構が明確化してくるのが、守護大名の拠点である守護城下町である。^⑨ 一九九三年の日本考古学協会シンポジウム『守護所から戦国城下へ』^⑩や千田嘉博^⑪によって、守護城下町は、全国的に一辺二〇〇メートルに及ぶ方形の守護館を中心に、大小の方形館や寺院が群集する景観であったことが指摘された。二〇〇四年に開催された第十二回東海考古学フォーラム岐阜大会でのシンポジウム『守護所・戦国期城下町を考える』^⑫では、守護城下町の復原が精緻化され、その景観には共通性が高いことが指摘されるに至った。それは、守護館を中心として、その周囲に広く散在する中小規模の方形の館群が、方格地割の施工によって結びついているという景観である。仁木宏はこのような守護城下町の空間構造を「方形・方格プラン」と呼び、このようなプランが広く地方で採用されたのは、各地の守護が幕府の権威を地方において創出する必要性に迫られたためと説明している。^⑬

仁木のいう「方形・方格プラン」は、複数の方形館を結ぶ直線道路によって構成される「方格プラン」段階と、都市空間全面に広がる網目状の方形街区が施工される「方形・方格プラン」段階の二段階に区分される。仁木は、「方形・方格プラン」が全面的に施工された痕跡が発掘調査等で確認されなくても、そこには守護の認識ないし理念としてプランが存

在したとする。仁木の言うプランには、計画・理念・認識としての方形方格街区と、実際に施工された街区との二つの意味が区別されて含意されているとみることができよう。つまり、守護権力は、計画・理念・認識としての「方形・方格プラン」を有していたが、現実には全ての守護城下町においてそのプランを貫徹できたとは限らず、それを受容する側の地域社会の構造や既存の空間形態に応じて、部分的に、あるいはアレンジされた形態の都市空間が実現されたと考えることができる。

② 戦国期城下町

全国的に共通性の高い守護城下町の空間構造は、天文期を中心とした一六世紀第二四半期に大きく転換する。明確な転換は、城郭において現れる。千田嘉博は、守護権力の戦国大名化に伴って、政庁・居住・軍事機能が山城に一体化された戦国期拠点城郭が形成されることを主張した。^⑭このとき、九州南部や東北地域では、戦国大名を中心とした強力な家臣編成が進展しなかったため、並列的な「館屋敷型城郭」となったとし、拠点城郭化の地域差を指摘している。^⑮そして千田は、家臣団の屋敷をも含み込んだ戦国期拠点城郭は、守護城下町から戦国期城下町へと、城下町の空間構造をも転換させたとする。

それでは戦国期城下町は、どのような空間構造となったのだろうか。二章で述べたように、小島道裕は、戦国大名の主従制的支配におかれた家臣、直属商工業者の屋敷から成る城下凝集域と、大名の直接支配が及ばなかった在地の市町とが併存する二元構造を指摘した。^⑯小島の二元構造論に対しては、近年、仁木宏が批判と対案の提示を行っている。^⑰まず、空間の二元構造を支える論理に関しては、城下凝集域は、守護所以来の守護公権という「上からの公」を支配論理とする空間であり、市町は地域社会の核として「下からの公」を体现する空間であったとする。また、空間構造に関しては、中部以東の東国については小島の主張する二元構造で説明が可能であるが、西国や畿内の城下町は異なる形態であったことを

指摘した。そして、地域によって異なる空間構造を規定した要因を、権力の集中のみに求めるべきではなく、権力構造の特質や、地域における社会構造の「個性」を考慮に入れる必要性を主張した。すでに、市村高男も、東国の城下町を事例として、戦国期城下町は広大な都市領域内に、城郭や家臣屋敷、町場、寺社門前などがゆるやかに統合した多面的で分散的な空間構造であったと指摘している^⑮。

戦国期城下町の空間構造の多様性の要因は、地域における権力の存在形態や社会構造のみに求めて良いのだろうか。仁本宏は、畿内において、城下町と併存した都市である寺内町のネットワークの果たした経済機能を高く評価し、これを畿内で顕著な城下町が派生しなかった理由としている^⑯。また、近江から北陸においては、天台寺院が山腹や山麓に寺坊を集中させ、寺坊都市が多く形成されたが、これらの天台系寺坊都市の遺構を踏襲・再編して、戦国期に城郭や城下町が建築されたことは広く知られている。また、交通の結節点となった港町が、館や城郭に近接する城下町もみられることから、港町の空間構造が城下町に影響を及ぼした可能性もある。このような研究をふまえると、戦国期城下町の空間構造の多様性の一因は、既存の中世集落や同時期に併存した別の都市の空間構造の影響にもあることが分かる。

戦国大名による家臣集住政策の達成度や、経済・流通支配のあり方は、領主の権力構造のみならず、地域の政治・社会・文化・宗教的文脈に影響され、城下町によって大きな差があった。さらに、地域によって異なる既存の都市空間の構造も城下町に大きな影響を及ぼしたため、戦国期城下町の空間構造は地域によって多様なものとなった。ここから、戦国期城下町においては、戦国大名による都市計画よりも、地域の社会構造や既存の都市空間構造の方が、現実の空間構造に大きな影響を与えたことが推測される。つまり、都市空間全域を覆う戦国大名の都市計画ないし理念は明確でなく、たとえあったとしてもそれが城下町空間全域に完全に実現した可能性は低く、現実には地域における既存の構造をより強く反映した多様な空間構造が現出したと考えることができる。

③ 織豊期城下町

織豊期における城郭構造の飛躍的な発展については、千田嘉博や中井均の研究に詳しい。千田は、織豊系城郭の普請面に注目し、虎口の発達段階を明らかにした。^{②③}中井均は、石垣・礎石建物・瓦のセット使用を織豊系城郭成立のメルクマールとした。^{②④}

画期的な変化を遂げたのは、城郭だけではない。戦国期城下町の空間を二元構造として説明した小島道裕は、織豊権力による天下統一が進む中で、一六世紀第4四半期以降、城下町の空間構造も一元化・求心化し、近世城下町に近づいていくとする筋道を鮮やかに提示した。^{②⑤}織田・豊臣・徳川氏の天下統一過程において、統一権力やその家臣によって新設ないし改修された織豊期の城郭と城下町は、急速かつ飛躍的な変化を遂げ、近世城郭・城下町へと近づいていったとする見解は広く支持されている。

それでは、具体的には、どういった空間的事象を画期として、近世城下町は成立するのだろうか。一つは、城下町における武家地と町人地の分化が挙げられる。先述した小島は、天正四（一五七六）年の安土城下町において、二元化していた空間構造は市町が城下に統合されることで一元化を果たしたとして、安土を画期としている。ただし、安土においても、武士と商人の居住地区分は徹底されず、また城下空間全体を覆う統一的な町割もなされなかった点に限界があり、天正一三（一五八五）年の豊臣秀次による近江八幡城下町建設において、長方形街区の町割と身分による居住地分化が達成され、近世城下町が完成したとしている。^{②⑥}

また、町割を指標として、近世城下町の成立を論じる見解もある。前川要は、長方形街区と短冊形地割のセットから成る町割は織豊系城下町において独自に発生したとし、それが給人居住域と市町部分を統合した範囲を覆うようになる安土城下町を、戦国期城下町を脱した近世城下町の初源として位置づけた。さらに近江八幡城下町になると、武士と商職人の居住地分化がなされるようになり、慶長元（一五九六）年以降は、長方形街区と短冊形地割が惣構内全域に施工され、近

世城下町が完成したと評価した。²⁴⁾ 玉井哲雄は、同じく町割に注目するが、街区形態と連動する都市全体の形態をも指標として、近世城下町の成立を論じている。玉井は、線状都市においては長方形街区が施工されるが、一六〇〇年前後の豊臣後期大坂城下町以降、地形を変える規模の大工事によって、城郭を中心とした求心的な町割を可能にする宅地造成がなされ、面状都市である近世城下町が成立したとする。このとき、武家地が確立し、商工業者の町屋で構成される町並景観も整備されたと指摘する。また、江戸・京・大坂という巨大都市においては、縦方向にも横方向にも空間の拡大可能な機能的な町割手法として正方形街区が導入されたとして、正方形街区が首都クラスの近世城下町の成立に果たした意義を高く評価している。²⁵⁾

宮本雅明は、天守に座した領主から城下町の中軸となる本町を貫いて設定されたヴィスタを、公権力の一元化・求心化の視覚的演出として、近世城下町の成立要件に位置づける。そして、織田政権では城と城下町を一体化した空間設計が達成されなかったが、長浜以降の豊臣政権下での城下町では、天守を見通すタテ町型ヴィスタを基軸として、マチ空間が設定されるとする。関ヶ原戦以降に建設された徳川政権下の城下町においては、このような空間設計からヨコ町型ヴィスタへと転換したと論じた。²⁶⁾

兵商分離、惣構と町割の施工、ヴィスタの設定のうち、どの指標を用いるかによって、近世城下町成立の時期は異なるが、豊臣期とする点では見解は一致している。この豊臣期における画期的な城下町空間は、秀吉本人の関与する城下町だけでなく、天下統一の過程で服属した各地の大名の城下町や、各地に赴任した秀吉家臣の城下町にも建設された。小島や仁木は、大名たちは、豊臣政権下で標準的な城下町建設を行うための一種のマニュアルを学び、地域で実践したとし、これを「豊臣大名マニュアル」と呼んでいる。²⁷⁾

織豊期城下町を、織豊権力によって達成された、戦国期城下町の発展形とみる見方については、多くの批判がある。仁木は、織豊政権は城郭・城下町空間の一元化・求心化に成功したとするが、その要因を、織豊政権が畿内都市の持ってい

た城郭技術や惣構、都市ネットワークといった先進的な技術を他の大名に先駆けて掌握したことに求めている。玉井は、近世化の指標と考えられる両側町や長方形街区が、織豊期城下町に由来するとする見解には疑問を呈しており、在地の町から発達した技法として評価する。伊藤裕久の研究も、こういった都市建設の手法が、在地の寺内町でいち早く行われていたことを示す。このような見解をふまえれば、「豊臣大名マニユアル」も、決して織豊政権内部のみで発想されたものではなく、畿内地域の都市空間の実態をふまえて作成されたことになる。

この「豊臣大名マニユアル」が各地に普及することによって、一元的で求心的な織豊期城下町が各地に建設され、全国的に画一的な城下町空間が成立することは、多くの研究者に共有された見解である。とはいえ、実際には統一政権による城下町プランの受容には、地域における既存の城郭・城下町の構造や服属した大名の権力構造によって相違があることも指摘されている。^⑤

以上の成果をふまえると、織豊期においては、織豊政権、とりわけ秀吉によって、求心的で画一的な城下町の都市計画が、現実の空間構造として実現されるようになり、その計画と理念は「豊臣大名マニユアル」として全国に流布したと考えられる。しかし、この都市計画も、豊臣政権内のみで構築されたのではなく、畿内地域における既存の都市空間の影響を受けて作成された可能性が高い。「豊臣大名マニユアル」という都市計画は、地方における城下町建設・改修時に強力に推進されたが、実際には、地方では戦国期以来の地域構造・都市構造に影響を受けて、アレンジされた形態として受容されたと考えることができる。

近年の研究によって示された戦国期から織豊期にかけての城下町の変遷過程を、現実の空間構造と武家権力の都市計画・理念との相違という観点から捉え直すと、武家権力が主導して実現を試みる都市計画と現実の空間構造とは、時期によって程度は異なるが、常に乖離が見られると言える。両者が最も近接した都市が織豊期城下町であり、逆に最も乖離した都市が戦国期城下町であると言えよう。この二つの空間の乖離を引き起こした大きな要因が、地域社会の構造とその地

域において先行する都市の空間構造であったと考えられる。つまり、戦国期・織豊期における城下町の空間構造は、武家権力の空間認識・理念を反映した都市計画と地域におけるその受容の相克の過程を経て現出したものである。

上記の見解は現段階での粗い素描に過ぎず、今後議論の精緻化を進める予定であるが、ここでは、中世国府・府中と同様に、空間概念を峻別することによって、中近世移行期の城下町についても重層的な空間の変遷過程を描くことが一定程度可能となることを、今一度確認しておきたい。

（3） 地域構造と都市空間

前節で示したように、領主権力のあり方や政治・社会・文化・宗教、先行する都市の空間構造といった地域固有の構造は、武家権力の都市計画以上に、現実の城下町の空間構造に対して大きな影響を及ぼしたことが想定される。いわば武家権力の都市計画が現実の空間構造に反映する際の変数となったのが、地域であったとも言えよう。

地域と城下町の空間構造との関連は、城下町成立以前の荘園や村落構造を説明することで、より深く論じることができ。京都西郊の西岡における、荘園や村落を視野に入れた地域研究はその好例であろう。仁木宏は、西岡における勝龍寺城が織豊期に細川忠興によつて拠点城郭として利用されたのは、それ以前の西岡地域における結集の場の機能を受け継ぐものであったためであることを指摘し、福島克彦は荘園における政所屋敷を踏襲して在地領主が地域に根付いていったという筋道を示した^③。これらの見解は、地域における特定の場所のもつ機能は、踏襲ないし継承される可能性が高いことを示している点で興味深い。

地域における城下町の立地には、周辺市町の盛衰が大きく関連している。一九六〇年代以降、戦国期・織豊期城下町の中心地機能を周辺市町の形成・淘汰の過程との関連において説明する研究がなされてきた。例えば小林健太郎は、尾張における市・市町の立地とその変遷を検討し、戦国期から織豊期にかけて在地の市町が淘汰され、中心集落に経済機能が集

積される過程を明らかにした^③。千田嘉博は、このような尾張の市町の淘汰と中心集落の形成という動向に織豊期城下町の形成が大きく関与していることを指摘した^④。小島道裕は、近江国を事例として、一五世紀半ばにおける村落と流通路の再編が、一六世紀中期の新しい交易の場を誕生させ、それが城下町の形成につながったことを示している^⑤。

さらに、城下町の空間構造を規定した地域構造は、上記のような人文現象だけではないことにも留意しておきたい。これまでの研究では、城下町の地理的基盤である自然地形、主として微地形については、城下町の空間構造を規定する大きな要素としての関心はそれほど払われてこなかったように思われる。もちろん、城下町が展開する舞台として、自然地形を把握するという基本的作業は、多くの事例で行われている。しかし、自然地形の大規模な変改が行われていない中世においては、自然地形は単なる舞台という役割以上に、諸施設の立地や街路パターンを強く規定することが想定される。また、地域によって異なる多様な自然地形は、画一的な都市計画の施工を困難にすることから、自然地形も、他の人文現象と同様に、城下町の空間構造に大きな影響を及ぼしたと考えられる。このように、空間構造と都市計画の施工の両面に影響を及ぼす自然地形に対しては、他の地域構造と同様に、十分な考察が行われる必要がある^⑥。

- ① 山村亜希「南北朝期長門国府の構造とその認識」人文地理五二一三、二〇〇〇。前掲一章注⑤。前掲二章注②。
- ② 矢守一彦「都市プランの研究」大明堂、一九七〇。
- ③ 前掲注①。
- ④ 宮本雅明「城下町の空間類型」(都市史研究会編『年報都市史研究 二 城下町の類型』山川出版社、一九九四)。
- ⑤ 前掲二章注②「戦国・織豊期の城下町」。
- ⑥ 前掲二章注④。
- ⑦ 前掲一章注①。二章注③・④。
- ⑧ 前掲二章注③。
- ⑨ 前掲二章注⑤。
- ⑩ 前掲二章注⑤。
- ⑪ 千田嘉博「守護所から戦国期拠点城郭へ」(奈良大学文学部文化財学科文化財論集刊行会編『文化財学論集』一九九四)。
- ⑫ 守護所シンポジウム@岐阜研究会世話人編『守護所・戦国期城下町を考える 第一分冊 シンポジウム資料集』二〇〇四。
- ⑬ 前掲二章注③。
- ⑭ 前掲注①。
- ⑮ 千田嘉博「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」ヒストリア二一九、一九九〇。
- ⑯ 前掲二章注③。
- ⑰ 前掲一章注①。二章注③・④。

- ⑬ 前掲二章注⑦。
- ⑭ 前掲二章注⑫。
- ⑮ 千田嘉博「織豊系城郭の構造」史林七〇一、一九八七。
- ⑯ 中井均「織豊系城郭の画期——礎石建物・瓦・石垣の出現——」
- ⑰ （村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社、一九九〇）。
- ⑱ 前掲二章注⑫。
- ⑲ 前掲二章注⑫。
- ⑳ 前掲二章注⑫。
- ㉑ 前掲二章注⑫。
- ㉒ 同「町割・屋敷割・町家」（都市史研究会編『年報都市史研究——城下町の類型』山川出版社、一九九四）。
- ㉓ 前掲二章注⑫。
- ㉔ 前掲二章注⑫。
- ㉕ 前掲二章注⑫。
- ㉖ 前掲二章注⑫。
- ㉗ 前掲二章注⑫。
- ㉘ 前掲二章注⑫。
- ㉙ 前掲二章注⑫。
- ㉚ 前掲二章注⑫。
- ㉛ 仁木宏「戦国時代、村と町のかたち」山川出版社、二〇〇四。

IV おわりに

一九八〇年代以降の日本中世都市研究においては、空間に焦点をあてた研究が主流をなし、学際的な共同研究が盛んに行われてきた。近年では、方法論の回顧がなされ、学際研究における資料批判とその解釈の方法に大きな関心が寄せられている。しかし、学際研究であるからこそ不可避に生じる、空間概念と空間構造への研究視角の不統一については、これまでほとんど認識されてこなかった。そこで、本稿においては、二章で五つの研究段階を措定し、それぞれにおいて、空間をどのようなものとして把握してきたか、その背景にはどういった議論があるのかを検討した。その結果、各研究段階

- ㉜ 福島克彦「乙訓・西岡の城館と集落」（中井均・仁木宏編著『京都乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』文理閣、二〇〇五）。
- ㉝ 小林健太郎「大名領国成立期における中心集落の形成——尾張平野の事例研究による検討——」史林四八一、一九六五。
- ㉞ 千田嘉博「尾張国における織豊期城下町網の構造」（村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社、一九九〇）。
- ㉟ 小島道裕「都市の場・地域と流通・消費」国立歴史民俗博物館研究報告九二、二〇〇二。同「二五世紀の社会的画期と集落——特に水利・水論をめぐって——」琵琶湖博物館研究調査報告二一、二〇〇四。
- ㊱ 近年、筆者は尾張津島と能登七尾を事例として、微地形レベルの自然地形と都市空間構造との関係を検討し、本文で述べた課題の予察としている。本格的な検討はこれからの課題である。山村亜希「中世津島の景観とその変遷」愛知県立大学文学部論集（日本文化学科編七号）五三、二〇〇五。同「中近世能登七尾の湊町と城下町の景観」（矢田俊文・千田嘉博編『能登七尾城と加賀金沢城——中世の城・まち・村——』新人物往来社、二〇〇六）。

によって、空間に対峙する問題設定が異なり、それに応じて分析方法も異なるために、導き出される空間も、復原レベルやスケール、抽象度が異なっていたことを指摘した。このような現状をふまえ、今後の中世都市空間研究の進展のためには、以下の二点の検討が有効であると考えた。

第一に、従来の研究における空間概念の相違を認識し、その精査と接合を行う検討である。このような研究の試みとして、筆者が行った中世国府・府中研究における空間概念の検証を挙げた。そして、空間のもつ重層的な位相を理解することによって、異なる空間概念の関連を論理的に説明することができるとを示した。さらに、空間の重層性の分析は、従来の社会構造論を絶対的な前提とした空間史とは異なる、空間そのものに立脚した空間構造論の創出につながる可能性を持つ。第二に、第一の検討と関連して、都市計画としての空間と現実の空間構造という二つの異なる位相の空間に着目した。その有効性を検証するために、研究蓄積の厚い戦国期・織豊期城下町研究を例として、二つの異なる空間がどのような関係にあるかを概観し、戦国期・織豊期城下町においては、二つの空間は近接と乖離を繰り返すという変遷過程を描いた。そして、両者の関係に影響を及ぼす変数が、多様な地域構造のあり方であると考えた。

本稿で行った空間概念や空間構造への研究視角の検討が、研究者自身の空間へのまなざしの認識の模索を促し、今後の空間研究の発展に貢献するものであることを期待したい。

〔付記〕 本研究には、平成一四年度―一六年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B）一四七七八七〇四五）を使用した。

horse trade limitation was also aimed at prices and purchases within the territory under the direct control of the emperor, therefore, its main purpose was to secure enough horses to confront the Xiongnu as well as the marquises. In 168 BC, Wendi got rid of the checkpoints, probably including those which were set up on the border with the territory of the marquises, which suggests a detente with them in the middle of his reign.

One of the most famous reforms is the abolition of mutilation as punishment in 167 BC, and fixed terms of the hard labour were also set at the same time. Although the background has been explained in the context of the penal system reform, the details of the penal system recorded in the *Ernian liling* suggest another viewpoint.

The problem that threatened Wendi in the second half of his reign was the attacks from the Xiongnu, which intensified after 169 BC, and their troops threatened the capital in 166 BC. Defending his empire, Wendi carried out several plans, one of whose ends was to reorganize the system of labour services. As part of this trend, the hard labour system must have been rationalized. Viewed from a different viewpoint, hard labour without any fixed term meant an endless necessity of supplying official food because convicts were issued a certain amount of food, at least in principle. We have to count the abolition of the mutilation as a penalty as a way of economizing.

The Review of the Studies on the Spatial Structure of Japanese Medieval Cities

by

YAMAMURA Aki

Studies of Japanese medieval cities have been interdisciplinary, including the fields of history, archaeology, architectural history, and geography. The central issue of the studies has been how to reconstruct and explain the “space” of the cities, but the strict meaning of the key concept “spatial structure” has never been explored. However, current studies have arrived at the point of reassessing their perspectives and methods of spatial analysis from their own academic points of view. This paper aims to review the studies of Japanese medieval cities by examining the meaning of the spatial structure and perspectives on spatial analysis.

Prior to the 1970s, historians had displayed a strong interest in the late-medieval castle towns, which were seen as immature feudal cities on the verge of developing into the consummate feudal cities of early-modern times. They determined the locations of the castle, residences of the warriors, and markets in each city, and they used this data as a standard to estimate the level of development as a feudal city. They understood the “spatial structure” as the relative connection of the locations of these three elements.

In the late 1970s, influential papers were published by the historian *Amino Yoshihiko*, who defined the space where people engaged in various economic activities free from the intervention of a feudal lord as an “urban location”. During the same period, archaeological surveys produced many remarkable results, especially on some early medieval cities. The conceptual term urban location was reconstructed in actual spatial form by a group of historians and archaeologists working together who used the many actual excavations of early-medieval sites. Because this method of reconstruction was used to make up for the lack of space where archaeological surveys had not been conducted, the abstract model of the center and periphery was applied to the entire urban space. This method caused confusion between abstract and concrete spatial structures when using the term urban location.

On the other hand, other historians and archaeologists joined to initiate the study of the changes in castle towns from late medieval to early modern times, but in manner divorced from the older theories about feudal cities. They found the medieval castle towns had two different varieties of space. One type of space was under the control of powerful lords, and the other type was space that was free to a certain extent from the power of the lords. They claimed such multivalent space was unified by the powerful lords in early modern times. Their dynamic but linear view of the development of the history of castle towns had a great influence on many researchers. Furthermore, their method of reconstructing space that clarified the concrete morphology and function of urban elements of the city as a whole was also widely accepted. The space reconstructed by this method was recognized as the spatial structure of the city.

In the 1990s, an architectural historian presented a remarkable model to explain the history of the space of the Japanese cities from ancient through modern times. That model, composed of two symbolic factors, was exceedingly abstract. It succeeded in explaining the multiple and complex space of medieval cities in their totality. In other words, this meant that the spatial structure of the city was a model that was symbolic and highly abstract.

As is demonstrated in this paper, studies of Japanese medieval cities have not

shared a common understanding of the most important concept of spatial structure, so researchers have employed perspectives appropriate to their own themes in analyzing space. Due to the confusion borne of a lack of recognition of the concepts of space and spatial structure, researchers have faced problems in exchanging results of studies with each other. The fundamental cause of this problem lies in the attitudes of most researchers who have not paid serious attention to space itself.

What then would be an effective solution to this problem? This paper proposes that one solution is to distinguish the space planned by the lords from the actual space of the cities, while recognizing the diversity of space itself and carefully referring to the basic concepts of space used in geography. Applying this perspective toward the studies of castle towns, this paper constructs a new history of these spaces from late medieval to early modern times and demonstrates the validity of the method.

From the last quarter of the 15th century to the first quarter of the 16th century, lords who were linked to the political center possessed city plans that consisted of a rectangular format and grid road pattern. But their plans were not always realized in actual space as planned because local societies did not always accept them in total. The actual spatial structure was formed by the lords and local societies modifying the city plans to fit local contexts.

In the second and third quarters of the 16th century, lords who had developed into representatives of local societies did not have any clear city plans. Actual spatial structure was influenced not only by the actions of the lords, but also by that of other local representatives and other types of spatial structures in local cities. As a result, there was a variety of actual spatial structure of castle towns.

In the last quarter of the 16th century, powerful lords unified the diversity of regional society in Japan and started to establish a nation state. These powerful lords had rigid city plans and forced their vassals and bureaucracy to realize them in their own territories as a proof of submission to the lords during the process of unification. Many castle towns were built, and then rebuilt, in a common format all over Japan. The city plans of lords had great influence on the actual spatial structure of local castle towns, nevertheless, the plans were accepted and modified to some extent depending on the local context. As this exploration of castle towns suggests, the studies of medieval cities contain latent possibilities for constructing a new history of space by modifying the way the space of cities is seen.